

ジャムズネット東京メンバーインタビュー 第13回

聞き手：池田みどり

児童虐待、あるいは不登校など子どもに関する多くの問題が山積みになっています。未来を背負う子ども達に何が起きているのか？今回は、現場で子ども達の問題に真正面から取り組む澤谷厚子さんに、お話を聞きます。海外に住む親子のために臨床心理士によるカウンセリングを提供する“With Kids”の代表でもあり、ジャカルタでカウンセリングネットワークを築かれた功績もお持ちです。

■澤谷厚子さん



略歴：臨床心理士。ジャカルタ在住時に、在留邦人のためのボランティアグループ「ジャカルタカウンセリング」を立ち上げる。帰国後、「With Kids —海外に住む子どもの心の健康をサポートする臨床心理士の会—」を主宰。

現在、都内の公立中学校2校のスクールカウンセラーと児童養護施設の心理士を兼務。

With Kids ホームページ：http://heartland.geocities.jp/withkids_kaigai/home.html

・臨床心理士になられたきっかけは？

小学校の卒業時には「医者になる」と書いていましたね。でも、どちらかというと頭脳は文系でしたので青山大学文学部教育学科の心理学を専攻することになりました。当時はまだ、臨床心理士という資格がなく、大学院では「学習心理」を研究しました。在学中、実習で「愛育養護学校」に行くことになり、そこで「発達障害」の子ども達に出会ったことが、後の人生を決めることになりました。卒業後そのまま合計4年ほど勤務。私の場合は、臨床心理学は学問から入るというより正に現場から入ったという感じです。

当時愛育には重度な自閉型の知的障害の子どもが多かったように思います。彼らは純粋で、こちらが素にならないと付き合えないことを体感しました。あの子達の前にいくと、すごくピュアーになれるんです。そのことが心地よくて、「はまっちゃった」というのが、本音です。それを感じるまでには2~3年かかりましたけど。当時校長だった津守真先生は、子ど

もをありのままの姿で受け入れる温かい姿勢があり、大きな影響を受けました。

体調を崩し、辞職せざるを得なくなり、子育てが始まりました。でも半年後には、デイケアセンターで仕事に復帰し、障害を持つ子どもの母親達の心理教育に携わりました。子育て中は子どもための英語教師をやっていたこともあります。平成元年から1年間ほど、千葉袖ヶ浦で、自閉症の子ども達の為に石井哲夫先生が開設された「のびろ学園」に勤務しました。その後は、夫の転勤で仙台に移り住み、5～6年の間、仙台市児童相談所に非常勤で心理判定員をしていました。

・ジャカルタカウンセリングを設立された経緯を教えてください

1995年11月から、夫の転勤で家族そろってジャカルタで生活することになりました。子どもの学校を決めて通学させるまでの3ヶ月ほどは、何もかもが不安定でとても辛かったです。しばらくして、子持ちのお母さんピアニスト4人が始めた「ジャカルタ・マザーズ・クラブJMC」という、日本人の母親たちの自助グループがあるということを知りました。母親と子どもがいれば、私が動ける場があるだろうと思ったので、すぐ連絡を取って参加させてもらうことになりました。1996年の1年間はその活動に協力しながら、リサーチをしました。「JMC」では、ジャカルタ背の子育てを中心に、母親の目から見たレストラン・ショッピング情報などを情報誌として月1回発行していました。この活動は今でも続いています。

当時その中心になってた福士美和子さん(ピアニスト)から「幼児健診をやってほしい」という話が出ました。日本では当たり前に行っている幼児健診ですが、海外にいとそれがありません。家庭内で身長や体重を計ることはできますが、「大きくなったね！」と専門家や子育て仲間と一緒に確認し、喜んでもらえることが励みになります。幼児健診の一つの目的は発達障害の早期診断・早期療育にありますので、ぜひやりたいと思いました。ただ、私だけで健診をしても発達障害の疑われるお子さんがおられた時に、その後の療育的な関わりができませんので、思案していました。

1996年の年末、ある集まりで偶然隣り合わせになったのが、当時ジャカルタ領事館医務官であった[仲本先生\(ジャムズネット東京代表\)](#)です。早速、相談活動や幼児健診のことなどについて相談したところ、「ジャカルタカウンセリング」の立ち上げに快く協力して下さることになりました。

・ジャカルタカウンセリングの活動の広がり

1997年1月、私とあと二人の心理士で、日本人母子への相談活動を目的とした「ジャカルタカウンセリング」を立ち上げました。このグループは心理およびその関連領域(教育・福祉・医学・等)の有資格者であることがメンバーの必須条件です。私の在イ約8年間で、平均としては新規相談が年に20件ほどありました。「発達障害」に関するご相談が、一番多かったですね。ジャカルタでの暴動もありましたが、スタッフが充実したおかげで、1999年には母親相談も含めた幼児健診もついに始めることができました。毎年1回平均30人ほどの受診がありました。発達障害の場合、母親だけでは対応が難しいので、療育グループを結成しました。日本人学校にも特別支援クラスができました。ジャカルタカウンセリングは今でも言語聴覚士を中心に現地で活動を続けています。

私の帰国が近くなった頃、幼児健診の存続を期待してJOMF(海外邦人医療基金)に、子どもの心理発達に対応できる日本人医師の定期的派遣を依頼したところ、快諾されました。小児科医が派遣されるこの動きは、ジャカルタだけでなくマニラ、シンガポール、タイやドイツなどでも実施されるようになりました。

・“With Kids”について

約8年間のジャカルタでの生活を終え、2003年6月帰国しました。その後もジャカルタからいろいろと相談を受けており、海外の日本人学校にこそ、スクールカウンセリングが必要だと実感しました。2006年4月に、海外経験のある資格者があつまり、「With Kids —海外に住む子どもの心の健康をサポートする臨床心理士の会—」を立ち上げました。基本的にメールで相談を受けます。現在20名ほどの国内外の臨床心理士が在籍しています。毎年、海外の日本人学校を訪問し、現地での講演会や相談活動をしています。また年に1回は在イ経験のある心理士を中心に、ジャカルタでの幼児検診のお手伝いをしています。子育て相談や発達障害が主ですね。相談者の大半は母親で、言葉の遅れや友達ができないなどの子どもの悩みを抱えるお母さんたちの力になればと思っています。

※With Kids ホームページ: http://heartland.geocities.jp/withkids_kaigai/home.html

・スクールカウンセラー／児童養護施設での仕事を通して感じること

帰国後、2004年4月からはスクールカウンセラー(SC)として公立中学校に勤務し始めました。不登校や問題行動、発達障害など、学校内の問題はいろいろです。問題を抱えている子ども達には心理士との対話を薦めています。また母親と対話も重要です。家庭の複雑さが原因になっていることも多く、時には養護教諭と一緒に家庭訪問をすることもあります。

SCとしての勤務を通して感じることは、学校選択性によって学区が崩れ、学校の格差が目立ってきています。学区が崩れてきたことにより、地域の子育て力が低下したことは、とても心配ですね。

子ども家庭支援センターで虐待の問題にも関わっていました。今は週3日、親元から離れた3歳から18歳までの子どもを預かる児童養護施設の心理士もしていますが、児童の入所理由の約6割がネグレクトも含めた「虐待」です。

現在、虐待加害者更生プログラムとして、森田ゆりさんの開発した「MY TREE ペアレンツ・プログラム」を実施しています。「子ども虐待とは人として尊重されなかった痛みや悲しみを怒りの形で子どもに爆発させている行動である」という考えです。被害者ケアはあるのですが、加害者の心のケアをしなければ、原因は払拭されません。2001年から関西地方を中心に実践されてきていましたが、関東では初めての試みです。今年で2年目ですが、この活動はさらに広げていきたいと思っています。

・今後の活動について教えてください

「With Kids」の活動は、臨床心理士の社会貢献ということで、ボランティア活動です。今後は今まで通りメール相談を中心に、年に2回くらい海外の日本人学校や日本人会などを訪問し、直接の相談活動をしたいと思っています。会の運営にかかる費用は、メンバーの会費と心ある理解者からのご支援が頼りですが、海外での活動はすべて参加者の自費です。本職を持ちながらの活動ですので、無理せず、のんびりと楽しみながら続けていきたいと思っています。

施設での仕事は、施設内の心理士としてだけではなく、地域に向けての『虐待予防活動』を今後も進めていきたいと思っています。

・ジャムズネット東京に期待すること

海外に暮らす日本人が安心して暮らしていけるよう、「何か困ったことがあったら…」「現地では解決できないことがあったら…」JAMSnet。海外から日本に帰る時の不安があったらJAMSnet となるように。正にネットワークを生かした活動を期待しています。